

## おくのほそ道 レジューメ

『おくのほそ道』 元禄 15 年（1702 年）刊。 完成は元禄 7 年（1694 年）

松尾芭蕉 寛永 21 年（1644 年） - 元禄 7 年 10 月 12 日（1694 年 11 月 28 日）

天下泰平の元禄期前後は、古典ブームであった。とくに、『徒然草』は松永貞徳の公開講義によって、俳諧ネットワークを支える豪商などに爆発的に読まれはじめた。松永貞徳の貞門派は、一定の古典の教養と、歌学の伝統を重視する。

松永貞徳は、母が冷泉家。叔父が藤原惺窩であるため、公家に気兼ねなく、また、家康の保護もあって、古典を儒学者ら（林羅山、藤原惺窩、中院通勝、宗巴）と、儒学、仏教、歌学を共同研究した。古典を公家家学から開放した。

松永貞徳 （元亀 2 年（1571 年） - 承応 2 年 11 月 15 日（1654 年 1 月 3 日））

父は松永永種で、母は藤原惺窩の姉。俳諧は連歌・和歌への入門段階にあると考え、俗語・漢語などの俳言（はいごん）を用いるべきと主張した。

しかしやがて貞徳らによるそれまでの「古風」に対して新しい表現「新風」が現れて貞門の地位を奪った。新風は「談林派」と呼ばれ、連歌師でもあった西山宗因を筆頭に、浮世草子を成立させた井原西鶴らが参画していた。談林派が十年ほどの短い最盛期を終えると、その後には松尾芭蕉があらわれ、「蕉風」と呼ばれる作風を示した。貞門派の「詞付」、談林派の「心付」に対して、蕉風は「句付」と評された。

元禄期は、旅案内書も流行した。

『おくのほそ道』の句は、

神祇、釈教、恋、無常、羈旅、述懐といった連句の形式を踏んでいる。

グランツーリスモ (GT)

イギリスのパブリックスクール師弟の卒業旅行

19世紀のイギリスでは、貴族階級などの裕福な家庭の子女は自宅へ家庭教師を呼び、教養や道徳などを学ぶことが一般的であった。(数学、ラテン語、古代ギリシア語) こうした教育課程の最終段階として、欧州への2~3年に及ぶ長期の旅行を行うことがあり、こうしたいわば長期の海外修学旅行を **Grand Tour** (グランドツアー、イタリア語表記は **Gran Turismo**) と呼んだ。

なお、**Gran Turismo** で使用された当時の馬車は当然長期の旅行に耐えるものであり、フランスやイタリアの製作工房 (カロツェリア) のものが多用された。

エルメスは、馬具、ルイ・ヴィトンは旅行鞆の専門店である。

カロツェリアという日本のカーナビメーカーがある。

日産の **GTR** も、クレイジーケンバンドの『**GT**』もグランツーリスモが語源。

西欧では、詩人、劇作家、小説家の順で尊敬されている。

ホメロス、ウェルギリウス、ダンテ、シャイクスピア、プーシキン、ヘルダーリンなど、民族詩人は、尊敬されている。芭蕉も、外国人が見れば民族詩人である。

紀行文と俳諧を総合した、なぜ芭蕉が、民族詩人なのかは、「おくのほそ道」を読むとよくわかる。

李白 「春夜宴桃李園序」より

「夫天地者万物之逆旅光陰者百代之過客」

「逆旅=宿屋」 「過客=旅人」

「天地は、万物の宿屋で、過ぎ去る月日は何万年の旅人」

渡し船や、運送船の船頭などをさす

今では、長距離ドライバー、電車の運転手、パイロットなどであろうか。

杜甫は、洞庭湖畔、李白は、安徽省当塗、

西行は河内国の弘川寺、宗祇は箱根の湯本で客死



千住は奥州街道の最初の宿駅。深川から千住まで、手漕ぎの船で上ると 3 時間くらいかかる。

弟子も見送りのために同乗した。

杉風は、杉山元雅。芭蕉の弟子でパトロンだった。築地の小田原町で魚問屋を営む。「魚の目は泪」は、杉風が涙ぐんでいるという解釈もある。

「又いつかはと心ぼそし」

「かしこまるしで（四手）の涙にかかるかな又いつかはと思う心に」西行 山家集

四手＝注連縄（しめなわ）や玉ぐしにつける白地の紙。紙垂

「かしこまり謹んで奉る幣に涙がかかるよ。四国行脚へ出かける自分はいつまたお参りできることか、もしかしたら出来ないのではと思うと。」

（新潮日本古典集成、山家集から抜粋）

(ウィキペディアより)

古神道においては、神域はすなわち常世（とこよ）であり、俗世は現実社会を意味する現世（うつしよ）であり、注連縄はこの二つの世界の端境や結界を表し、場所によっては禁足地の印にもなる。

紙垂（しで）とは、注連縄や玉串、祓串、御幣などにつけて垂らす、特殊な断ち方をして折った紙である。単に垂とも表記し、四手とも書く。

文献での紙垂の例として、古事記の天の岩戸伝承のなかで書かれている、岩戸の前で賢木の枝に下げた「白丹寸手（しらにきて）」「青丹寸手（あをにきて）」がその初出と言われている。

「しで」という言葉は動詞「垂づ（しづ）」の連用形で、「しだれる」と同根である。古くは木綿（ゆう）を用いていたが、現在では紙（通常は奉書紙・美濃紙・半紙）を用いるのが一般的である。

断ち方・折り方にはいくつかの流派・形式があり、主なものに吉田流・白川流・伊勢流がある。ほかにも二垂・八垂にするものなどがある。また、注連縄作りの伝承の中で、旧字「絲」の象形に見えるように「いと、いと、いと」と発声しながら折るという口伝もある。

落雷があると稲が育ち豊作なので、紙垂は、雷光・稲妻をイメージし、邪悪なものを追い払う。

玉串・祓串・御幣につけた場合は祓具としての意味だが、注連縄に垂らして神域・祭場に用いた場合は聖域を表す印となる。また、相撲の横綱は、土俵入りの際に紙垂を垂らした綱をつける。（ウィキペディアより）



栴子一衣（かみこいちえ）厚紙を糊でつぎ、柿渋を塗ってもみほぐした着物

（今のウインドブレーカー。柿渋にはタンニンが含まれる。防虫作用があり、酸っぱい臭いがする。魚の網、即身仏などにも塗るそうである。茶カテキン。ワインもタンニンが含まれる。）

★コノハナノサクヤビメについて （ウィキペディアより）

大神（おおみわ）神社

富士山本宮浅間大社

（ふじさんほんぐうせんげんたいしゃ）



コノハナノサクヤビメ（ヒメ）は、日本神話に登場する女神。一般的には木花咲耶姫と記される。また『古事記』では木花之佐久夜毘売、『日本書紀』では木花開耶姫と表記する。コノハナサクヤビメ、コノハナサクヤヒメ、または単にサクヤビメと呼ばれることもある。『古事記』では神阿多都比売（カムアタツヒメ）、『日本書紀』では鹿葦津姫または葦津姫（カヤツヒメ）が本名で、コノハナノサクヤビメは別名としている。

天照大神（アマテラス）の孫であるニニギノミコト（瓊瓊杵尊、邇邇芸命）の妻。オオヤマツミ（大山積神、大山津見神、大山祇神）の娘で、姉にイワナガヒメ（石長比売、磐長姫）がいる。ニニギ（瓊瓊杵尊、邇邇芸命）の妻として、ホデリ（海幸彦）・ホスセリ・ホオリ（山幸彦）を生んだ。

日向に降臨した天照大神の孫・ニニギノミコトと、笠沙の岬（宮崎県・鹿児島県内に伝説地）で出逢い求婚される。父のオオヤマツミはそれを喜んで、姉のイワナガヒメと共に差し出したが、ニニギノミコトは醜いイワナガヒメを送り返し、美しいコノハナノサクヤビメとだけ結婚した。オオヤマツミはこれを怒り「私が娘二人を一緒に差し上げたのはイワナガヒメを妻にすれば天津神の御子（ニニギノミコト）の命は岩のように永遠のものとなり、コノハナノサクヤビメを妻にすれば木の花が咲くように繁栄するだろうと誓約を立てたからである。コノハナノサクヤビメだけと結婚すれば、天津神の御子の命は木の花のよ

うにはかなくなるだろう」と告げた。それでその子孫の天皇の寿命も神々ほどは長くないのである。

コノハナノサクヤビメは一夜で身籠るが、ニニギは国津神の子ではないかと疑った。疑いを晴らすため、誓約をして産屋に入り、「天津神であるニニギの本当の子なら何があっても無事に産めるはず」と、産屋に火を放ってその中でホドリ（もしくはホアカリ）・ホスセリ・ホオリ（山幸彦、山稜は宮崎市村角町の高屋神社）の三柱の子を産んだ。ホオリの孫が初代天皇の神武天皇である。

#### ★コノシロについて（ウィキペディアより）

全長 10cm ほどの若魚が「コハダ（小鰭）」と呼ばれ、酔べしたものが寿司種として珍重される。下ごしらえの加減で風味が大きく変化し、小型で身が薄く包丁で上手に捌くことが難しいことから、寿司職人の技量を計る魚とも呼ばれる。特に関東地方でこの傾向が強い。これらの若魚は日本では毎年 5 月頃から市場に出回り始め、夏が最も美味な時期といわれる。

コノシロは日本になじみのある魚なので、日本の逸話が多い。コノシロは飯の代わりになるほど大量に獲れたことから、「飯代魚」となったと伝わる。焼き方が伝わる関西では焼いても食された。しかし、焼くと臭いがきついため、コノシロという名前については、以下のような伝承が伝わる。

むかし下野国の長者に美しい一人娘がいた。常陸国の国司がこれを見初めて結婚を申し出た。しかし娘には恋人がいた。そこで娘思いの親は、「娘は病死した」と国司に偽り、代わりに魚を棺に入れ、使者の前で火葬してみせた。その時棺に入れたのが、焼くと人体が焦げるような匂いがするといわれたツナシという魚で、使者たちは娘が本当に死んだと納得し国へ帰り去った。それから後、子どもの身代わりとなったツナシはコノシロ（子の代）と呼ばれるようになった。

コノシロはほとんどが酔漬けなどに加工され、焼いて食べるのが少ないのはこの臭いのためという説がある。また、武家社会では、「この城を焼く」に通じることや、切腹の際に出されるため、「腹切魚」と呼ばれて敬遠された。江戸時代、幕府によりコノシロは禁止されていたが、寿司にすると旨いため、コハダと偽って江戸の庶民は食した。